

健康文化

我が生涯と今世紀展望

金子 昌生

まえがき

健康文化 26号（平成 12年 2月発行）に「21世紀を迎える心の準備：科学・文化に関する雑感」を寄稿して、3年以上経ち、21世紀に突入して今世紀を生き始めた。過去 15～6年の間に、青少年向きに、文教図書出版（株）から 1）「無からの出発」 2）「無駄にたくない三男の人生」 3）「平和の尊さ」 4）「医療の国際貢献—動く巨大病院構想」 5）「成せば成る粘りの人生」 6） 7）「医の家系に脈打つ医の心」 8）「二十一世紀に継げたい我が社会規範」（書籍名、掲載頁、発行日は巻末に記載）の投稿をした中の 8）に少し手を加えたものを以下に記す。

我輩の生まれたのは二十世紀の前三分の一の一九三三年五月六日である。所謂昭和一桁族であり、昭和十五年尋常小学校に入学、翌年第二次世界大戦が始まって国民学校に変わり昭和二十年終戦と共に小学校に戻り、昭和二十一年四月旧制中学に試験で入学した。戦争中は、「欲しがりません勝つ迄は」と何もかも我慢の連続であり昭和二十年六月十八日三重県四日市市と静岡県浜松市にB 2 9が約三十機襲来し一夜にして町は廃墟と化した。八月十五日の玉音を聴き戦争が終わった事を実感、生きていて良かったと思った。終戦後の大混乱の中では、その日に食べる物も無く月に一回魚の切れ身一切れ、米一粒あとは色の黒く変った干し薩摩芋のみ。イナゴを取ってきて食べたりスズメを空気銃で撃ち殺して食べた。これは唯一の動物性蛋白で貴重であった。水は百米位離れた所にある井戸まで汲みに行き、風呂に入る為には酒樽（72リットル）を積んだ荷車で十往復は、せねばならなかった。物資は殆ど無く、本当に日本は潰れて無くなってしまわないかと、ガムシャラに働き、勉強し、日本再建に粉骨努力した。語学は英語の時代が来ると悟っていたが、中学では東京文理科大学卒のバリバリの先生に恵まれ厳しく鍛え上げられた。幸い近所にカトリック教会の神父さんが布教のため居られ本物の英語にも接する事が出来た。一世代を約三十年として計算すると一九六六年迄は高校・大学・インターン・大学院と教

育を受ける第一世代であった。

第二世代は愛知県がんセンターにて働き始め大学の講師・助教授・教授と診療・教育・研究の第一線で働く充実した時代として位置付けられる。この壮年時代は働き盛りの現役時代でヨーロッパ式に数えると第二の人生である。この第二の人生の中で最も大きな損失は医大五年生であった三男を交通事故で亡くした事である。もっと家庭的であれば本人とも接するチャンスが多かったのに残念でたまらない。本人が生きておれば今頃は立派な医師として社会貢献して居るであろうし、何よりも本人が一番無念に思っているであろう。

一九九九年三月に六五年十一月で定年退官し第三の人生を始めた。余力を結集して人の為に尽すべき熟年・老年時代である。先ず始めの四年三カ月は日本赤十字社に在職し血液センター所長として、尊い献血をして下さる人を助けて生きがいのある生活をさせてもらった所である。今後は臨床家として常葉リハビリテーション病院院長を勤め、患者さんの活力を発揮させる様、努力したいと考えている。

以上、我輩の過ぎ去った人生の概観と現状を述べて来たが、その経験を元に現二一世紀を如何に豊かに生きていけるか二世帯を振り返りながら、今世紀展望をいささか述べてみたいと思う。

二世帯さかのぼると小学生の孫の世代となる。五十年以上戦争もなく平和な日本に住んでいる少年少女は全くすべてに恵まれている。欲しいと思った物は全て手に入り、やりたい事は殆ど全て可能であるように思われる。現状を具に観察すると、「過ぎたるは及ばざるが如し」であり「苦あれ楽あり」のハングリー精神が無い。恐らく何も無い所に放り出されたら困り果てて何も出来ない事に成りそうである。昔に比べて現在、最も良い事はスポーツが何でも出来、スポーツマン精神で苦勞を体験し負けても立ち上がる。勝負には必ず負けがある。「負けるが勝ち」と言う事もあり負けて初めて勝つ喜びが大きくなるのである。少子化の時代になり兄弟が少ない、友人も少なくてケンカの相手も少ない。ケンカをしても手加減が出来ない、やり過ぎてしまう。現在、最も欠けているのは、唯我独尊で自分の事しか考えず他人が居る事に気遣いが無い。社会に住む人間としては欠陥車のようなものである。「自分が尊敬される為には他人を尊重する事」から始めるべきであろう。

次に一世代さかのぼって息子の時代である。娘が居なかったのも、女性に関しては実感が無い。息子達はスパルタ教育で厳しく育て過ぎた。仕事第一の毎日の中で子供の夕食を夜中まで待たせたり家庭サービスとしてのリクリエーションも殆ど無く、唯「勉強せよ」と尻に鞭打つばかり、封建的で全く文化的でなかった。これは明治生まれのオヤジ譲りでオヤジのやっていた事はすべて良い事と思い、けし掛けた結果である。現在の第二世代の人達の社会規範では、個人主義の傾向が強い。仕事より寧ろ家庭中心に成って来ている。この事自体は日本が文化的となり良い傾向である。唯、明治・昭和一桁族から見ると無気力が目立ち、その日をエンジョイするのみで、将来に対し何も期待していない様に見受けられ、情けない限りである。もっと自信を持って日本の将来を夢見る「生きがい」を發揮してもらいたいものだ。コスモポリタンの時代になり、グローバルな発想が重要となり世界人の一人として地球人は今後どうあるべきか考える必要がある。

人口爆発、食料問題、エネルギー問題、地球温暖化など二十一世紀を生き抜く為に避けて通れない難問が山積みされているのである。今、最も重要と思われる第二世代の働き盛りの青・壮年時代の人達には、「やる気」を持つ事と、スピード、そして持続性である。「ぐず」で、すぐ「あきらめる」のは良くない。しかし、慌てて失敗する事もあるので、良く熟慮して、一步一步足が地に着いた努力の積み重ねが必要で、「若い時の辛苦は買うてもせよ」と言われる様に、人の嫌がる事を率先して引き受け、出来るだけ経験豊かに成る事が肝要である。将来、過去に一度もやった事が無い事は手も足も出ない。自分の経験こそ、年を取ってからでも活かす事が出来るその人の宝なのである。宝を持ち、宝を活かせる事が、実力を發揮出来る元である。

最後に、熟年・老年時代についてであるが、昔は人生五十年と言ったが、今は人生八十年の時代である。定年で現役を離れてからでも、もう一世代生きなければならない。その醍醐味は、第三世代こそ、本人自身が生活をエンジョイすべきである。やり残していた事で是非やりたいと思う事を次から次へとやり遂げる事である。この為最も重要な事は体力であり健康である事、他人に迷惑を掛けない事であろう。

自分自身の人生の有終の美を飾るのは、生き生きとし、若い人に負けない気力と、ゆっくり、慌てないで、マイペースで行動する事である。長い人生の中での経

験を活かし充実した毎日を、じっくりと噛み締めながら、一日一日を楽しく生きがいを持って生命を全うする事が出来、自然死を迎えられれば、最高である。

(常葉リハビリテーション病院院長・浜松医科大学名誉教授)

参照出版物：

金子昌生　：　文教図書出版（株）より出版せる書籍名；掲載頁；発行日

- 1) わが人生論 静岡編（中）；33－35頁；昭和62年3月9日
- 2) わが人生論 愛知編（下）；34－39頁；平成6年11月22日
- 3) 一終戦五十周年記念—あの時私は；340－343頁；平成7年8月15日
- 4) 青少年へ贈る言葉「未来への提言」静岡編；42－44頁；平成9年4月9日
- 5) わが人生論 全国版 259－263頁；平成11年5月28日
- 6) 私の生き方 医の道を歩む；54－57頁；平成11年10月29日
- 7) 二十世紀の日本人生記録全集第一巻；456－459頁；平成13年8月13日
- 8) 人の道 私の社会規範；104－107頁；平成14年12月22日



金子昌生(70歳)